

下諏訪宿の機能および景観の変化

小島大輔・中村裕子・久保倫子・呉羽正昭

キーワード：宿場町，町並み，温泉，諏訪大社，御柱祭，下諏訪町

I はじめに

I-1 研究の課題

現在わが国では、669の自治体において1080のまちづくり条例（2000年）が制定されている¹⁾。とくに景観する関連のまちづくり条例については、策定自治体が476あり、条例数は514件（2003年3月時点）にのぼる²⁾。このうち、1995年以降に制定されたものは7割を超え、増加の傾向を示している。また、2004年6月には「景観法」も制定され、景観整備に関して法による規制・促進が可能になった。これらのまちづくり、とくに町並み保存の運動は、1960年代末に、妻籠、京都および倉敷などで開始された。その後、1970年代前半に各地に広がり、1974年には、全国町並み保存連盟が設立された。1975年には、「文化財保護法」が改正され、「伝統的建造物群保存地区」の制度が生まれた。

現在の町並み保全に関しては、長野県南木曾町の妻籠宿³⁾、埼玉県川越市の一番街商店街⁴⁾および長野県須坂市の歴史的景観⁵⁾など、報告事例が若干存在する。しかし、現存する歴史的景観を含めた様々な資源に対して、様々な方面から関わる地域住民の対応について、地域の性格の変遷とともに論じたものは少ない。従って、地域の産業構造などの社会的変化、および行政による条例・要綱や事業の展開の中で、地域住民による歴史的資源の活用の変化や意識の変革などを論じる必要が

ある。芦原⁶⁾は、「町並みは、そこに住みついた人が、その歴史のなかでつくりあげてきたものであり、そのつくられかたは風土と人間とのかかわりにおいて成立するもの」と述べており、町並み保全を通して望まれるものは、地域を再認識し、地域意識を形成することにあるともいえる。

ところで、江戸時代の主要街道における宿場町は、かなりの賑わいをみせていた。しかし明治中期になると、国内各地に鉄道が敷設され、長距離移動手段は列車が主要となった。その結果、宿場町としての機能は低下することとなる。さらに、主要国道から外れた宿場は著しく衰退した。しかし、箱根⁷⁾、軽井沢などは、例外的に外国人滞在者の避暑地・別荘地として⁸⁾発展した。第二次世界大戦後、マスツーリズム時代になると、昔ながらの景観を残した妻籠、奈良井などは多くの観光客を集めた。しかし、それ以外の宿場町では、近年のまちづくり運動の隆盛以前は、その伝統への関心は低く、伝統的な景観は失われつつあった⁹⁾。

そこで本研究では、長野県下諏訪宿の機能や景観がどのように変化してきたのかを明らかにする。その際、宿場町を含む地域の産業構造の変化、行政の取り組み、および住民意識の変化などに着目する。

I-2 研究対象地域の概要

下諏訪町は諏訪盆地の北部に位置する。町の北部には三峰山、鷲ヶ峰を有する山地、南部は諏訪

湖に面した砥川の扇状地で構成され面積66.90km²をもつ。1893年（明治26）に町村制を施行し、100年以上の歴史をもつ下諏訪町は、人口23,050（2005年2月1日現在）、世帯数8,691（2004年10月1日現在）を有している。人口の多くは砥川の左岸の平地に集中し、市街地を形成している。下諏訪宿は市街地の東に位置し、旧中山道と旧甲州街道が合流しており（第1図、写真1）、温泉の湧く宿場町として発展した。また、この合流地点の東に位置する諏訪大社下社の秋宮の門前町でもあり、市街地の北端部にある春宮と共に諏訪信仰の拠点としての性格も有している。明治、大正から昭和にかけて製糸業地帯として隆盛を極めたが、世界恐慌を境に斜陽へと転じた。第二次世界大戦中には疎開工場地として軍需工場が展開した。戦後は、軍需工場で培われた技術をもつ男子労働者を主な労働力として精密機械工業が発達した¹⁰⁾。その後、1980年代よりアジア諸国への工場進出などにより精密機械工業は大きく変化している。

II 近世における下諏訪宿の地域構造

II-1 中山道下諏訪宿の構成

下諏訪宿は、1575年（天正3）に成立したといわれるが、その詳細は明らかでない。中山道中で唯一の温泉地であり、また諏訪大社があること、甲州街道と中山道の交わる場所であることから、江戸・京都・甲州方面それぞれから多くの人々の



写真1 旧中山道と旧甲州街道の合流地点
（2004年5月24日 中村撮影）

往来があり、中山道中有数の宿場町であった。中山道は下諏訪宿の江戸からの入り口である湯田町を通り、横町、立町、八幡町へと続いていた。また、本陣の前で直角に曲がっており、江戸・京都方向へ伸びる構造をしている。街道沿いには多くの旅籠や家々が立ち並び、さらに外側には百姓の家が位置していた様子もわかる（第2図）。

下諏訪宿は、宿場、湯治場、門前町としての3つの機能を有していたと考えられる。1688年（元禄元）に岩波太左衛門が問屋兼本陣を命ぜられ、明治維新まで岩波家によって代々その役割が受け継がれてきた。本陣には参勤交代の際に大名や幕府の役人、皇女和宮が御降嫁の折にもここに宿泊したといわれている。脇本陣は年代とともに移転を経験してきたが、幕末には、まるやがその務めを果たしていた。また宿場町の中心をなす旅籠屋は、旅人や商人の疲れを癒す重要な場所であった。かつては賄いつきの宿はなく、薪代と部屋代のみを払って自炊をする木賃宿が一般的であった。旅人が多くなると賄いつきの宿が次第に多くなり、それらが旅籠屋と呼ばれた。江戸時代を通じて旅籠屋と木賃宿が共存していたが、旅籠屋は1801年（享和元）の明細によると42軒（大2軒、中20軒、小20軒）であった。その他には、茶屋が2軒、商屋が15軒あった。宿の外れには木賃宿があり、巡礼者や下級の旅芸人などが利用した。その当時は宿泊客が非常に多く、足の踏み場もないほどに人が集まり雑魚寝をしていたという。

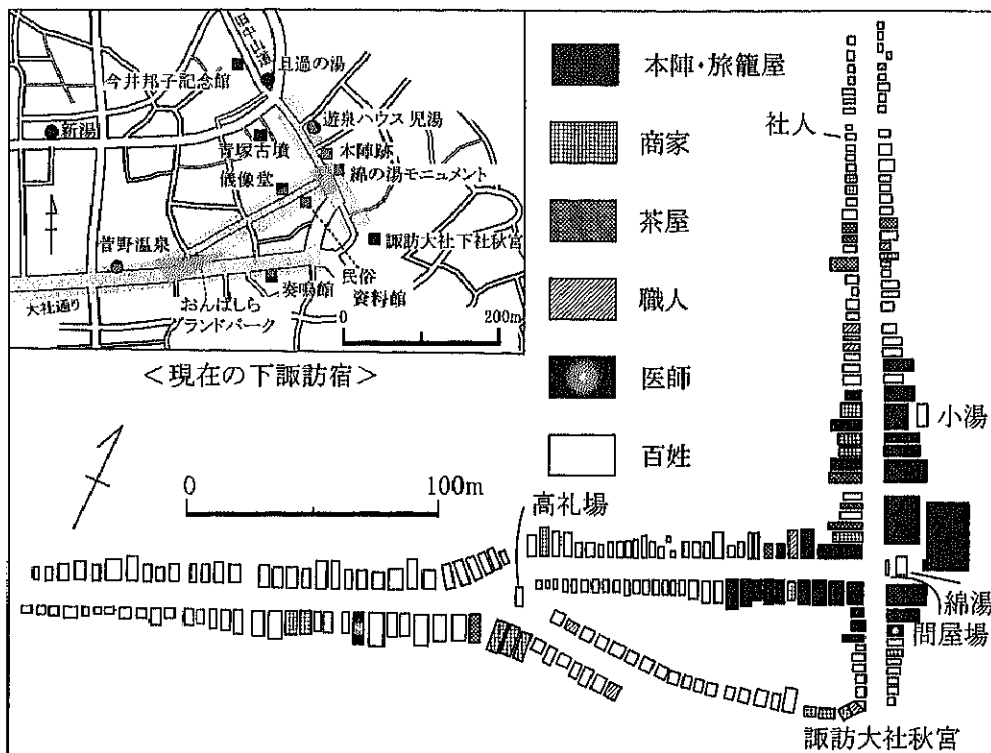
江戸時代には、参勤交代の大名や一般庶民などの往来が多かったが、明治時代になると宿場町を支えていた参勤交代が廃止された。それにより旅籠屋の多くは経営が成り立たなくなり、製糸業に転向するものも多くなった。明治期に入ると宿場を訪れる人々の様相が変化を示した。第3図は、1884年（明治17）の湊屋旅館の宿泊者名簿を基にして作成した図である。これより、宿泊者の多くは長野県内から来ていること、また北陸からの宿泊客が多いことがわかる。詳細にみると、宿泊者のうち関東・長野県北佐久郡から蚕繭糸商が、北陸からは売薬商人、いわゆる富山の薬売りが多く

訪れていた。またこの売薬商人らは、下諏訪を拠点にして諏訪湖周辺や他地域にも行商していた。その一方で、諏訪大社参詣や善光寺詣、さらに御岳を訪れる信仰者も多く、県内からの宿泊者数の

約4分の1は諏訪大社の参詣者であった。つまり、明治時代に入ると中山道や甲州街道を通る武士がいなくなり、新しい産業に関係する人々や参拝者が下諏訪宿の中心的な訪問者となった。した

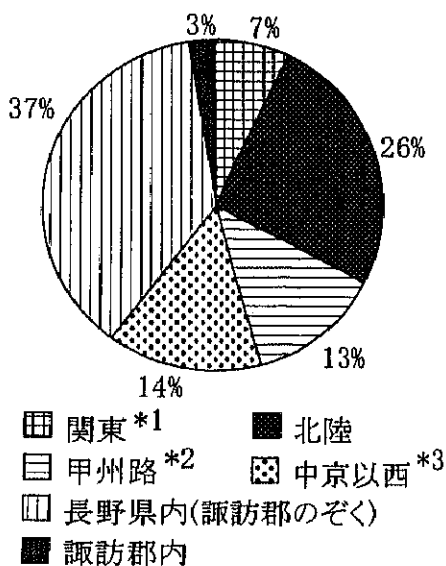


第1図 研究対象地域



第2図 文久元年の下諏訪宿

長野県文化財保護協会編 (1980)：『中山道信濃二十六宿』信濃毎日新聞社より作成



第3図 下諏訪宿湊屋旅館における宿泊客の居住地 (1884年)

下諏訪町誌編纂委員会編 (1963)より作成

がって、下諏訪町が宿場町としての機能を失い、製糸業など産業を中心とする町へと変化していく様子がうかがえる。

下諏訪温泉は、前述のとおり中山道唯一の温泉場を有し交通の要所であったことから、地元の人々はもとより多くの旅人、藩主やその家来などにも利用されていた。また、下諏訪宿周辺の地域が「湯之町」と呼ばれていたことから、温泉がこの町にとって重要な要素であったことがうかがえる。当時の下諏訪を代表とする温泉は、中山道沿いに位置する綿の湯・児湯・且過の湯の3つの共同湯であり、各々の共同湯が古くからの歴史と効能を有していた。幕末の頃までは旅籠は内湯をもっていなかったため、宿泊客は旅籠の下女の案内で地元の人々と同じ外湯を利用し旅の疲れを癒していた。また、それらの共同湯はいつも賑わっていたという。このことから、下諏訪温泉は人々

の湯治場としての機能も果たしていたことがわかる。

また諏訪大社下社秋宮の参道は、下社秋宮から現在の国道20号に向かって西へ伸びる道（八幡坂）であった。現在では秋宮の前に土産物屋が数軒見られるが、宿場町として栄えていた1861年（文久元）には道沿いに数軒の商家・職人の家以外には百姓の家のみが存在していた。したがって、諏訪大社に参拝する人々は、宿場町の旅籠に宿泊したと思われる。明治期ではあるが、湊屋旅館の資料（1886年）によると社寺参拝を目的とした当時の宿泊者のうち、およそ7割が諏訪大社への参拝者であった。また、共同浴場も宿場町の中にあるため、下諏訪を訪れた人々は必然的に宿場町へ足が向かう傾向にあったと推測される。つまり下諏訪の門前町としての機能は、諏訪大社下社の前から伸びる参道ではなく、宿場町にあったと考えられる。

Ⅲ 現代の土地利用変化

土地利用調査の範囲は、南北には諏訪大社下社春宮から下諏訪駅までの約1 km、東西には山間部との境から砥川周辺までの約1 kmを設定し、ほぼ下諏訪町北部のかつての下諏訪宿を含む（第1図）。この範囲には、下諏訪町の中心商店街、下諏訪駅など商業的要素の強い地域とその周辺の住宅地区、さらに諏訪大社下社春宮などの歴史的建造物、下諏訪宿として発展した温泉旅館の集中する地区などが含まれ住民には「三角八丁」と呼ばれている。このように調査範囲には、下諏訪町中心部に位置する下諏訪町の都市的土地利用および下諏訪宿以来の歴史的町並みが共存している。したがって、下諏訪町の特徴を捉える上で重要な地域といえる。

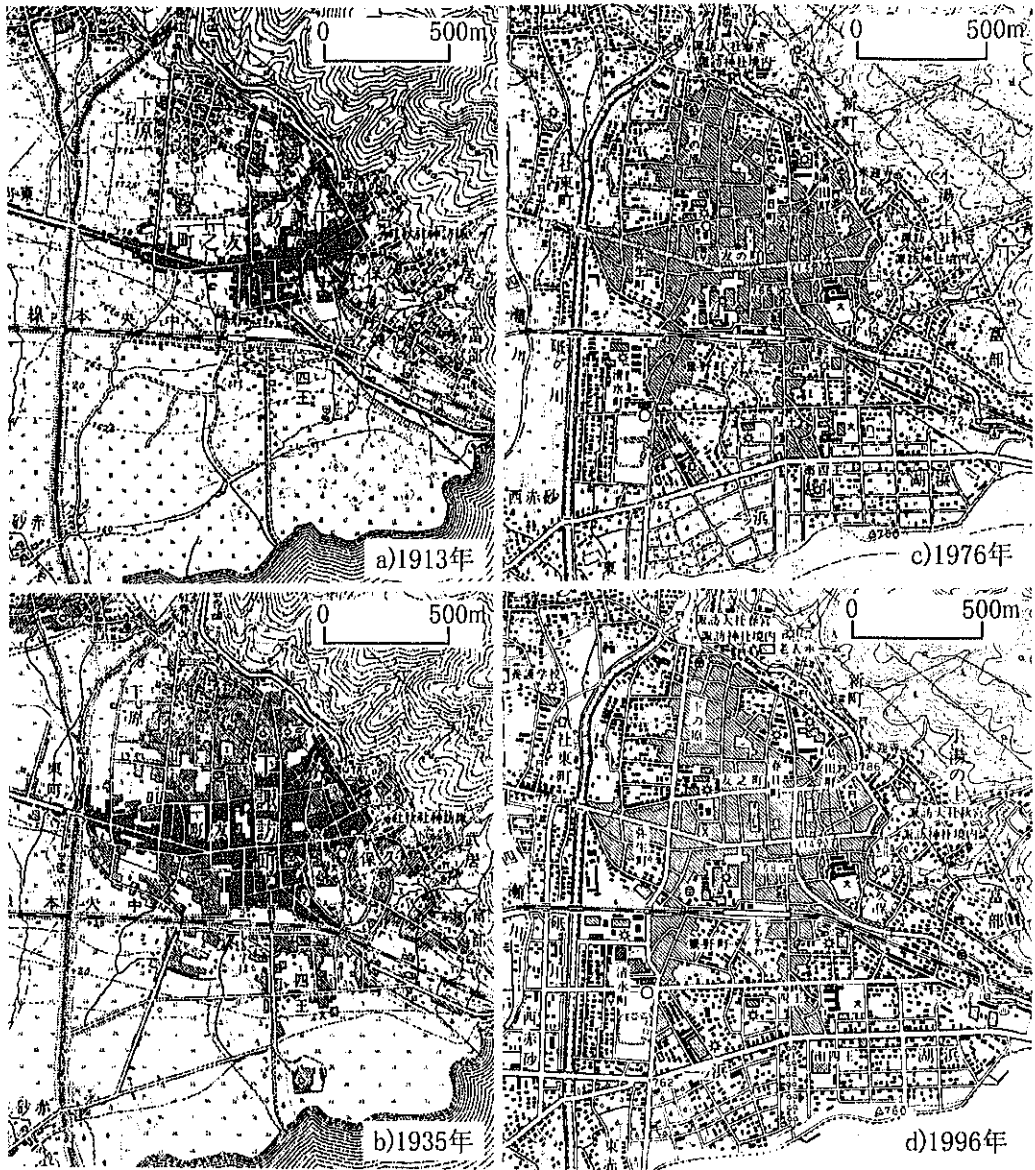
まず、下諏訪町中心部の変遷を捉える。1913年（大正2）の地形図（第4図）より、大正期の下諏訪町の中心は、中山道・甲州街道沿線および諏訪大社下社春宮・秋宮の周辺であり、人口密集地域がみられる。この地域は下諏訪宿として栄えた地域であり、多くの旅館や温泉入浴施設、料亭など

が軒を連ねていた。この時期は製糸業の隆盛期であり、町内や岡谷市の奥座敷として最盛期を迎えた頃の様子がかがえる。中心部のその他の地域では主として桑畑が卓越していた。一方、下諏訪駅南部の湖畔地域は、おおむね水田であり、市街地化がほとんど進んでいなかった。

次に、1935年（昭和10）発行の地形図（第4図）から、1913年時点で桑畑であった地域が人口集中地域に変容しており、市街地の拡大が看取できる。また、市街地は下諏訪駅南部にも拡大し、工場が増加したことによる人口の急増があったものと思われる。

さらに、1976年発行の地形図（第4図）においては、市街地が砥川から山際までの範囲に拡大し、農村的土地利用は砥川左岸の一部に残るのみになった。一方、中央本線の南部では、土地区画整備が行われ、秋宮前から移転した町役場、周辺には住宅、工場および公共施設などが立地している。また、岡谷市と諏訪市を結ぶ湖岸道路が開通し、国道20号線のバイパス的機能を有するようになった。下諏訪駅北部では、工場の周辺に商業施設が集積している。市街化に伴い砥川の護岸工事も行われ、砥川周辺にまで宅地化が進展した。また、学校が増設されていることから人口増加が著しかったことがわかる。

次に、これらの過去の土地利用を鑑みて現在の土地利用について述べる（付図）。現在の下諏訪町中心部は、農村的土地利用はほとんどなく、商業・工業・住居などの都市的土地利用が卓越する。このうち商業的土地利用は、主として国道20号線などの主要道路沿線に集積している。これにより下諏訪駅北部に市街地を形成し、さらに諏訪大社下社春宮付近まで拡大している。商店街の業種は、青果などの最寄品からめがね・貴金属といった買回品に至るまで多様である。軒先に商品を陳列した小さな駄菓子屋や小規模商店などが、「昭和的」な商店街の景観を形成している。これらの建物の多くは店舗兼住宅の構造を有している。また、商店や住宅に混在して病院や薬局も立地している。一方、主要道路沿線には銀行や事務所など



第4図 下諏訪町中心部における土地利用の変遷（1913年・1935年・1976年）

出典：1913年・1935年・1976年・1996年 2万5千分の1地形図 諏訪

の業務機能が集積している。また、歓楽街にあたる市街地西部では、多くのパブ・スナックなどの飲食店が集積しているが、店舗の老朽化または撤退が生じており衰退が著しい。これらの建物も上記の商店と同様に、店舗の二階部分を住居として小さな区割りに密集しており、駐車場は備えていない。これらの土地利用図中にみられる駐車場の

多くは、工場跡地や商店跡地などが転用されたものである。

次に、工業であるが、ほとんどの工場が家族経営的な中小零細企業であり、商工・住工の混在地を形成している。これらは小規模で住居兼工場であるものが多い。また、家族経営的な小規模な工場であるため、精密機械、とくに光学器械の内職

工場などは、外観からは一般住宅と区別するのは困難である。大規模な工場としては、市街地北部の武藤工業（株）や下諏訪駅北の三協精機製作所（株）がある。このように、下諏訪町中心部は、住居および工業との混在地であり、それぞれの機能が水平的・垂直的に密集し、家業と住居が結合している地域である。

次に、観光業は、旧下諏訪宿や諏訪大社下社春宮・秋宮、下諏訪駅前に集中している。旧下諏訪宿では、旧街道沿線に旅館業・博物館（奏鳴館・今井邦子記念館・民俗資料館・儀像堂）・温泉施設が集積している。景観保存の動きがあり、黒や茶の外壁をもつ蔵や低層木造建が一部に残る歴史的景観を備えた地区である。国道142号バイパスの開通（2004年）に伴い、この地区内を通行していた大型トラックなどの交通量が減少し、今後街歩きを楽しめる地区へと変化が期待されている。また、諏訪大社下社春宮・秋宮周辺には、土産物屋や飲食店、温泉施設などがみられた。とくに秋宮は旧下諏訪宿に隣接し、国道と通じていることから来訪者も多く、観光施設が集積している。下諏訪駅においては、構内に観光案内所が設けられ、バス・タクシーなどの交通も付随し、観光施設等への起点として機能している。

次に、住機能についてみると、住居は商店とともに密集している。また、市街地では一般に土地の取得が困難であるため、3階建以上の住宅や一階が店舗で二階が住居という造りの建物が多くみられた。しかし、店舗兼住宅では二階部分を締め切っているものが多く、現在はあまり利用されていない。これらの住宅は老朽化が進み、新しい住宅は多くない。また、温泉タンクの備わっている住宅が多くあり、内湯が普及している様子が見える。旧下諏訪宿の地域には、屋号の記された蔵が残存し、一部は住宅へ転用されている。街道沿いの民家は古い造りのものが多く、歴史的景観が残るが、これらのなかには空き家も存在する。一方、山際の住宅は平屋戸建て住宅が多く敷地が広い。とくに、諏訪大社下社春宮大門地区・八木地区の住宅は、古いものも多くあり、蔵を備え敷

地の広い住宅がみられた。またこの地域は、中小の製糸工場跡地が会社の寮やテニスコートを経て、教員宿舎秋の宮住宅と変容した場所もある。この住宅には駐車スペースが十分に確保されている。大門教職員住宅や県住宅供給公社砥川住宅についても、他の住宅地と比較すると広大な駐車スペースが存在する。また、下諏訪町中心部には、高齢者向け施設（グループホーム・ヘルパーステーション・老人ホームなど）が多くみられる。これらは、地元利用だけではなく温泉保養を目的に町外から高齢者を受け入れているとも思われるが、この地域の高齢化がうかがえる。また、保育施設が多いのも特徴的であり、町内の工場職員等の世帯や町外へ通勤する就労世帯が多く利用しているのであろう。

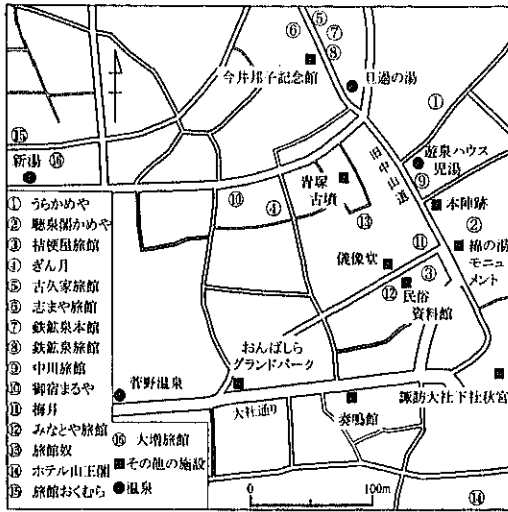
最後に農地であるが、下諏訪町中心部には都市的機能が卓越するため、周辺部の住宅地内や商業地の中に家庭菜園がみられる程度であった。周辺部の住宅地の農地の中には、製糸工場跡地と思われるものもあり、馬鈴薯・ネギ・ウドおよび植木類・果樹等が栽培されている。多品種・少量の農作物生産に特徴がある。

Ⅳ 現代の宿場町ルネッサンス

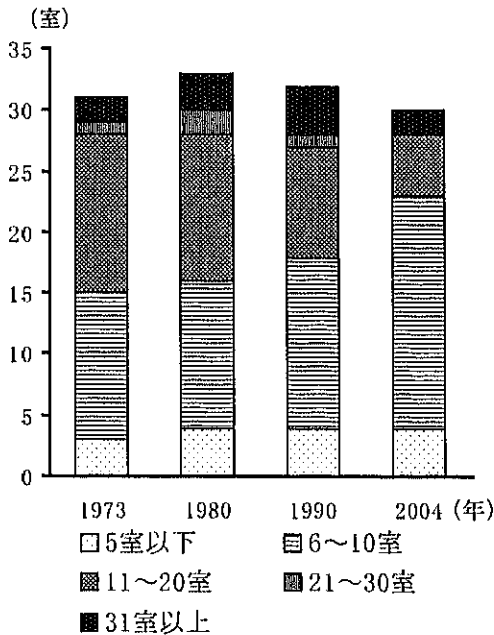
Ⅳ-1 旅館業の現在一宿場町としての再発見一

下諏訪宿における本格的な観光業への取り組みとして、旅館業者を中心に歴史的な町並み保存運動や街かど博物館事業がある。これらの詳細には次節で触れることとし、本節では中山道沿線の再興に大きな役割を果たしている宿泊施設（第5図）に焦点を絞って記述する。

第6図は1973年から2004年までの下諏訪温泉内にある旅館・ホテル¹¹⁾の室数毎の内訳を示したものである。この図より、6～10室および11～20室の規模の宿泊施設に大きな変化が看取できる。1973年において両者は、それぞれ、12軒、13軒と同程度であり全宿泊施設の多くをこの2者が占めていた。この傾向は1980年においても続いた。しかし、1990年、2004年を経て、6～10室の規模のものは増加する一方、11～20室の規模の宿泊施設



第5図 下諏訪温泉における主要施設の分布 (2004年)
2004年5月の現地調査により作成



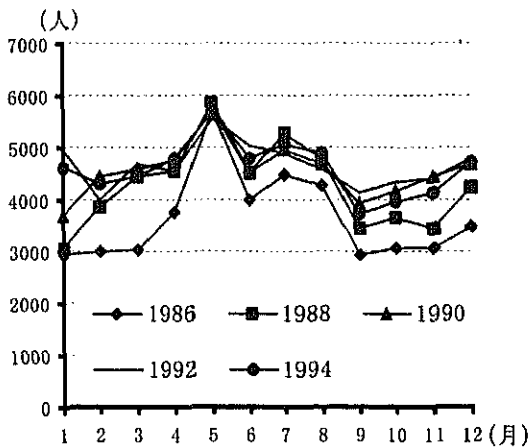
第6図 下諏訪温泉における規模別宿泊施設数 (1973年・1980年・1990年・2004年)
『長野県観光便覧』および現地調査より作成

の減少がみられる。すなわち、この時期において宿泊施設の小規模化が生じたといえる。また、2004年においては、1980年、1990年と増加傾向にあった21室以上の規模のものについても減少がみられ、31室以上の規模のものが2軒のみとなった。以上より、現在では宿泊施設の多くが20室以下の小規模な営業形態に転化している。この変化は、下諏訪温泉の宿泊客の変化とそれに伴う旅館の建替により生じたものである。以下では、大規模宿泊施設と小規模宿泊施設における客層の変化やその対応、宿泊施設の建替について比較する。

1) 大規模宿泊施設—「ホテル山王閣」の事例—

ホテル山王閣は、公営の国民宿舎で、1965年に営業を開始した。創業当時は、長野県と長野市内の企業による第三セクターによる経営であったが、1988年に県から町へ権利移管され、現在は町との第三セクターとなっている。建物は鉄筋5階建てで、54室 (260名収容可能) を有し、下諏訪温泉内では最大の規模である。従業員については、正社員23名に加え、パート・アルバイト50名、シルバー人材¹²⁾ 2名を雇用しており、その多くは、下諏訪町内から通勤している。御柱祭の時には、客が2割増になるため、臨時に地元学生を雇っている。

宿泊客の居住地は主に関東、名古屋であり、約7割は自家用車で来訪している。高速道路が整備される以前は、鉄道を利用した来訪者が大半だったという。また、宿泊客数の月別年次推移 (第7図) より、夏季に宿泊客が集中する傾向があるといえる。夏季は、家族単位での来訪客が中心であり、現在では一時盛んであった合宿での利用はあまりみられなくなっている。春は桜、夏は諏訪湖花火や蛸、秋は紅葉など季節の風物詩に加えて、豊かな温泉、諏訪大社を主として様々な宗教的施設などの観光資源に恵まれた下諏訪温泉では、冬季を除いて観光客が多く訪れる。冬季には、忘・新年会などで地元利用が卓越する。平日・週末でも客層の変化があり、平日は老人クラブや高齢夫婦のほか、ビジネス客が多い。週末は、これらに加え家族客やツーリング目的の小グループなども



第7図 「ホテル山王閣」における月別宿泊客数 (1986年～1994年)
ホテル山王閣資料より作成

みられる。

ホテル山王閣では、国民宿舎ということもあり、下諏訪温泉内の他の宿泊施設と比較して割安な料金設定、サービスによって料金の選択が可能である¹⁹⁾など、フレキシブルな営業を行っている。そのため人気が高く、全国の国民宿舎宿泊利用率 (2001年) においては第11位 (利用率54.9%) であった。

2) 小規模宿泊施設—「桔梗屋」の事例—

小規模な宿泊施設は、家族経営²⁰⁾が一般的である。桔梗屋はその典型的な例であり、旅籠屋として1690年頃に創業し代々旅館を継承してきた。現在の主人は女性であり、下諏訪温泉「おかみの会」の会長を務め、下諏訪の伝統を守るなどの活動を精力的に行っている。そこで、ここでは周囲の動向、およびそれに伴う利用客の変化・宿の建替を主に述べる。

桔梗屋は、150年程前に火事で建物が消失したため、建替を行った。当時は、木造2階で部屋は8部屋ほどであった。当時の下諏訪宿の旅館の多くは木造2階建であり、統一的な景観であったという。その後、1907年 (明治40) に客数の増加に伴って木造3階 (18室) に増築した。さらに大正期に入ると客数が増加し、下諏訪宿の最盛期を迎

えたため、木造3階の離れを増築した。離れは、1階が酒蔵としての利用、2～3階が調理室であり、本館は宴会会場として利用した。この時期は、製糸業従事者が、後には精密機械工業従事者が宴会目的で下諏訪温泉を頻繁に利用した時期であり、芸者文化も存在した。昭和期になると、下諏訪温泉内で他業種から旅館業に転向する者も現れた。

しかし、1985年の建替では木造2階 (6室・宴会場2室) に縮小した。主たる産業の衰退によって上記の宴会客が減少し、観光客を対象とした旅館を目指すようになったためである。当初は7階建の高層ビルで団体客にも対応させる計画もあったが、下諏訪の雰囲気と合わないことや、事業主の意思によって、木造2階という小規模な宿泊施設にすることを選択した。女将は、商業的な利益よりも下諏訪宿の伝統を守ることを重視している。そのため、万人受けするようなサービスよりも自分の納得したサービスを行い、その結果、「桔梗屋を愛してくれる客に來訪してもらいたい」という強い意志があった。女将の強い意志が、桔梗屋の建替の際、大きな影響を与えたといえる。桔梗屋が行ったこの昔ながらの造りへの建替はその周辺旅館にも影響し、その後、建物の建替の際に昔ながらの造りを維持する意識が強くなった。

3) 小規模宿泊施設—「古久家旅館」の事例—

古久家旅館は、公立学校共済組合および市町村職員共済組合の指定旅館である。代表者は、長年、東京都と長野県内で中学校の教員をしていたが、下諏訪に帰郷し旅館業を手伝い、現在それを継承している。古久家旅館の利用者の多くは団体客であり (第1表)、夏季の客層に前述の事例とは差異が認められる。そこで、ここでは客層の違いを中心に述べる。

古久家旅館は、和室7室、食堂、浴室、ロビー、厨房および20年前に設置した8台分の駐車場を有している。経営は、主人とその妻の家族経営であり、1泊2食付1万円以内という割安な料金設定となっている。現在の客層については、若い年代と高齢者の3、4人の小グループの利用者が主体

第1表 下諏訪温泉旅館収容人数の推移
(1980年・2004年)

旅館名称	収容規模(人)			
	1980		2004	
	一般客	団体客	一般客	団体客
うらかめや	35	45	50	60
聴泉閣かめや	80	100	60	50
桔梗屋旅館	30	50	15	—
ぎん月	60	70	55	80
古久家旅館	40	60	25	40
志まや旅館	40	50	30	50
鉄鉾泉旅館	50	80	25	50
鉄鉾泉本館	32	45	37	30
中川旅館	16	20	20	20
梅月	35	50	16	—
御宿まるや	50	75	12	—
みなとや旅館	30	40	12	—
旅館奴	40	50	20	—
ホテル山王閣	230	260	260	260
合計	768	995	637	640

【長野県観光便覧】および聞き取り調査により作成

であるが、夏季は団体の運動合宿客が大半を占め、グループ客は受け入れられなくなる。小グループは、中山道・甲州街道ウォーキング、諏訪大社下社春宮・秋宮を中心とした史跡めぐり、温泉療養などを目的としている。運動部系の団体合宿客は東京都からの大学生と高校生が主であり、町営の体育施設を利用することで対応している。これは主人が長年教員を勤めてきたことから、団体合宿の受け入れに積極的であるためである。しかし、1980年代以降、夏季の団体客受け入れの点で、富士五湖周辺や清里、白馬などとの競合が激化し、団体合宿客は減少しつつある。また、下諏訪町内および岡谷市の精密機器工業従事者が産業の衰退に伴い減少したため、宴会や食事会での利用も減少した。現在は、夏季の団体合宿による収入がほとんどである。

上記の古久家旅館と同様に、団体客の受け入れの多い旅館は他にもある(第1表)。その1つに、代々10室程度という中規模であり、家族経営で団体合宿客の受け入れに積極的に取り組む志まや旅館がある。その他、少人数のグループを主な対

象とするうらかめやおよび聴泉閣かめやも、室数については先述の二つの旅館と同程度だが、それぞれ50人から60人規模の団体合宿を受け入れている。これに応じて、パートタイマーも含め10人前後の従業員も雇用している。また、この2つの旅館は地元住民による法事や婚礼・宴会利用(収入内の約50%未満)も多い。ぎん月も団体合宿客が多く、客室数も16室と多い。さらに、ぎん月は、1948年に広間、1966年と1976年に広間・ホール、1993年に広間・ホール・食事処を増設している。そのため、その他の施設も充実しており、地域住民の宴会や会議での利用が多い。下諏訪温泉全体での団体合宿への取り組みとしては、旅館業者で構成された温泉部会の「女将の会」、「青年部」、「合宿部会」があり、このうち、合宿部会が予約を取りまとめ、団体合宿受け入れ可能旅館に割り振るという形態をとっている。

以上の分析から言えることは、まず、宿泊業者が観光者の嗜好の変化や交通網の発展に伴い、少数の大規模宿泊施設と、多数の小規模旅館とに規模において分化が生じたことである。それらは、経営やサービスなどの面についても、大規模宿泊施設が幅広い客層に対応したフレキシブルなサービスに特化していったのに対し、小規模旅館は常連客などを対象にこだわりのある高い質のサービスの提供に重きを置くという差異が認められた。このため後者は建替などにも慎重で、下諏訪宿の歴史的景観や「下諏訪らしさ」を重視する意向がある。一方で、小規模旅館の中には、常連客にこだわらず団体合宿客を積極的に受け入れていく旅館もある。これらは、下諏訪宿で旅館業を続けてきた伝統を守る意思は共通しているが、サービスに対して先述の旅館とは意識に差異が認められる。これらのことから、下諏訪宿における宿泊業は、地域の産業の変容に対応し、それぞれの経営方針や意思決定、施設の規模などにより宿泊客層の分化が生じ、これらの中である種のすみわけを行っているといえる。

Ⅳ-2 癒しの温泉地

下諏訪温泉は、中山道上で唯一の温泉地として鎌倉時代から旅人の疲れを癒し、下諏訪宿を支えてきた温泉である¹⁶⁾。古くから綿の湯(写真2)¹⁶⁾・児湯¹⁷⁾・且過の湯¹⁸⁾の3つを中心とした温泉で、現在では19箇所の泉源(30の湧水口中、19箇所が稼働中)から毎分約4700リットルの湯が湧き出ている。県内はもとより県外からの客も多く(第8図)、県内・県外を含め年間約60万人がここを訪れる。とくに御柱祭の年には、平年のおよそ2倍の客が訪問する。

また第9図によると、下諏訪温泉を訪れる利用

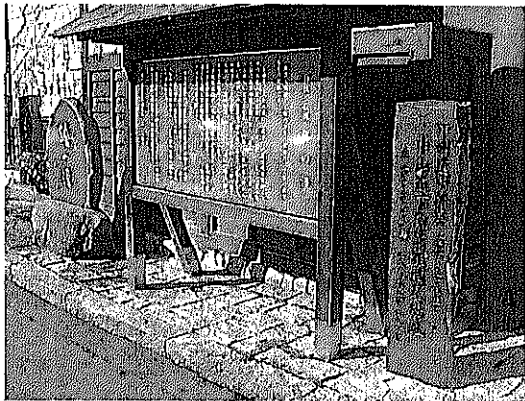
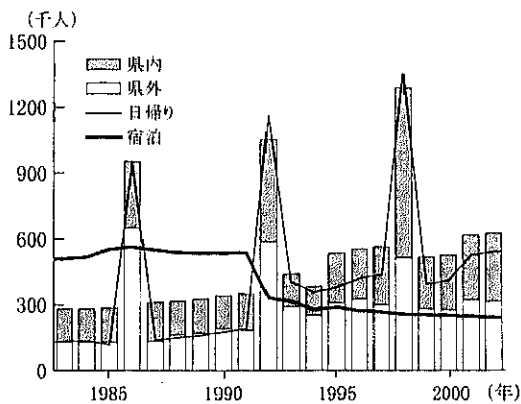


写真2 「綿の湯」のモニュメント
(2004年5月24日 呉羽撮影)

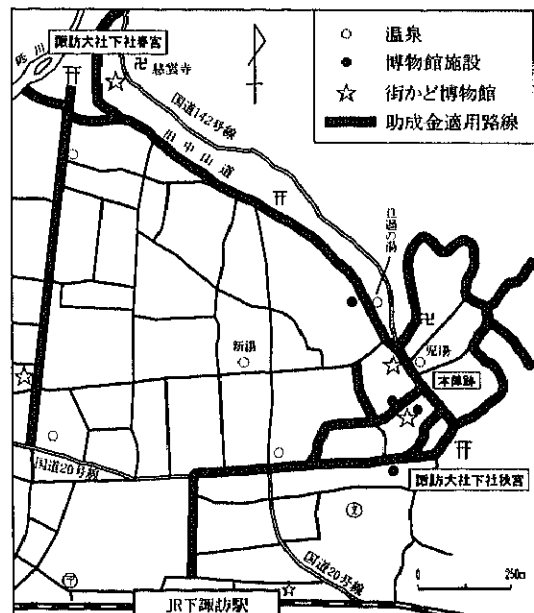


第8図 下諏訪温泉利用者数の変化 (1983年～2002年)

長野県商工部観光課資料より作成

者は年々増加しており、1990年頃までは県外からの利用者が多かったが、それ以降は県内の利用者の方が多い傾向を示している。1998年の長野冬季オリンピック開催の年や御柱祭が催される年には利用者が多かったこともわかる。また、1992年を境に宿泊者数が減少し日帰り客が急増した。その理由として、高速道路網の整備に伴う交通環境の改善により、首都圏から日帰りで観光できるようになったことが考えられる。また、1994年に町おこしの一環として下諏訪町において一般家庭への温泉引湯が始まった。一方、宿泊者数は御柱祭に関係なく毎年ほぼ一定の数を示しているが、1992年を境に宿泊者数は減少を続けている。

旧宿場町内で現在共同浴場として主に利用されている温泉は、児湯と且過の湯の2か所である。児湯は、1987年に綿の湯と合併し「遊泉ハウス児湯」として新しく2階建の建物に改装された(写真3)。当時は1日に2000人ほどの利用者があった。現在では平日には約400人、休日には約600～700人が訪れる程度に減少した。現在の従業員数



第9図 下諏訪町における観光振興条例助成金対象路線図 (1989年)

下諏訪町役場資料より作成

は5人である。且過の湯(写真4)の従業員数は現在3人で、1日に150~160人が利用し、平日と休日による人数の差異はほとんどない。また、両湯の従業員にはシルバー人材⁹⁾が雇用されている。

利用者の客層は、両湯ともに観光客よりも地元の人々の利用がかなり多く、その中心は高齢者である。その理由として、下諏訪町の各旅館にはそれぞれ温泉が引かれており、宿泊客は公衆浴場でなくそれぞれの旅館の中で温泉を利用する場合がほとんどであることが考えられる。製糸業が盛んだった頃には、工場の従業員らが多く利用していたが、現在では近隣の住民による利用がほとんど

である。また、両者とも早朝から夜遅くまで営業しているが、早朝に利用する高齢者が多い。高齢の利用者のほとんどは、毎週同じ曜日・時間帯に訪れることから、同時間に利用する顔なじみとの会話を楽しみにやってくる人が多いようである。下諏訪町の40%の家庭が自宅に温泉を引いているが、それでも公衆浴場を訪れる高齢者が多い理由はそのためであると考えられる。下諏訪温泉は、その利用客について、客数の増減、客層の変化などを経験し、現在においても住民による賑わいをみせる様々な人々の憩いの場所としてあり続けている。

Ⅳ-3 下諏訪宿の景観整備と町並み

1) 町並み保存・修景計画

下諏訪宿は、中山道29番目の宿であり甲州街道の38番目の終点でもあった。それゆえ、江戸時代には交通の要衝として機能していた。現在では本陣跡や老舗の旅館があり、古い家々も若干みられる。改築などによって建物が新しくなったものもあるが、宿場周辺の人々は時代を経ても同じ場所に住んでいることが多い。また、その周辺には多くの国・県・町指定の文化財が存在し、下諏訪町の中でもとくに歴史を感じることのできる場所である。一方、街道から奥まった場所には製糸業が盛んだった頃に使われていた藁倉が若干残っており、その当時の下諏訪町における産業形態の名残をみることができる。

近年、日本各地の温泉地にみられる問題として、マスツーリズムに伴う景観変化があげられる。観光地化された温泉地では、新しい鉄筋コンクリート造りの建物や外国風の建物が入り混じったり、観光施設の看板が温泉地に配慮のないものであったりすることから、統一性のない景観が目立っている²⁰⁾。それによって、伝統的な造りをもつ旅館が閉鎖されたり取り壊されたりし、温泉地としてのかつての町並みが失われている。しかし、1973年のオイルショックを契機として宿泊者数が減少したことにより、各温泉地ではさまざまな試みが行われてきた。その一つが、古い温泉地



写真3 遊泉ハウス見湯
(2004年5月26日 呉羽撮影)



写真4 且過の湯
(2004年5月26日 呉羽撮影)

の町並み整備である。草津温泉では、旅館を和風の趣を感じさせるような建物に改装し、江戸時代の浴場を復元した浴槽をもつ共同浴場を作るなどはたつきがみられる。また、下諏訪温泉でもそうした潮流の中で町並み整備が目目されている。

下諏訪においても産業の発展や建物の老朽化などにより、古くからの建物が姿を消してしまったところが多く、近年では宿場時代の建物がそのまま残存する例はほとんどない。その結果、連続した宿場町の景観をみることはできない。一方、発展を続けた精密機械工業も1970年代から衰退していった。そこで、下諏訪町では歴史のある古い町並みを保存し、統一的な景観をつくることによつてかつての宿場町としての町の活気を取り戻そうという気運が高まった。1989年に下社秋宮周辺の建物を中心として、特定の対象地域における建物の新設・増設または改修費用への助成金制度を核とした観光振興条例を制定した。

先述の第9図に、2004年の助成金の対象路線を示した。下社秋宮周辺を中心として旧中山道、国道20号・142号の一部、下社春宮・秋宮前の参道沿いが主な対象地域となっているのがわかる。一方で、商店などが集積する地域は対象地域外となっており、対象地域は観光地として重要な要素を有する場所とされていることがわかる。またこの助成金制度では、建物を新設・増設または改修する際には宿場町として統一感を損ねないような造りや景観にし、下諏訪宿の雰囲気を残すようにすることが助成を受ける条件となる。例えば、建物の柱は黒か茶、壁の色は白とするなどといった指針がある。助成金額は、費用が1000万円を超える事業を対象として費用の30%までを補助し、その上限を300万円としている。しかし、観光振興条例による助成金制度を利用して建物の改修・新築をした例は、平均して年に2件程度にすぎない。過去の事業の約60%は住宅の改修・新築などで、とくに近年は住宅や店舗併用住宅への利用が多くみられる。しかし、助成金の対象となっている地域の範囲と比べると件数は決して多くなく、統一した古い町並み・景観をつくることの難しさがうか

がえる。

2) 博物館

下諏訪町には町が運営する博物館、および博物館に相当する施設が5つある。このうちの3つは、国による町並みの保存、遺跡復元などを対象とした「ふるさと事業」を活用し、下諏訪町の「湯の里浪漫整備事業」と位置づけて建設された。オルゴールの博物館「奏鳴館」、中山道沿いに位置する「今井邦子文学館」および時計の博物館「儀象堂」がそれに該当する²¹⁾。

諏訪湖オルゴール美術館「奏鳴館」は、1995年に上記の事業により開館した。建物は以前同地にあった町役場の外観を復元したものである(写真5)²²⁾。館には、オルゴール生産で世界的シェアを誇る三協精機製作所の所蔵品約150点が展示されている。これらの展示に加えて、館に併設された工房における全国でも数少ないオルゴール作り体験が最も特徴的なものといえる。100以上の曲目から選曲でき、ケースも数種類から選択可能である。この体験は、年間に9,040人が利用しており、年間体験者数は増加傾向にある。また、この工房の運営には、指導者として現在15人ほどの技術者が従事している。開始当初はこの半数程度しかおらず、技術者によって主婦などの地域住民を技術者として育成し、現在の人員を得たのである。

諏訪湖時の科学館「儀象堂」は、中部電力の施

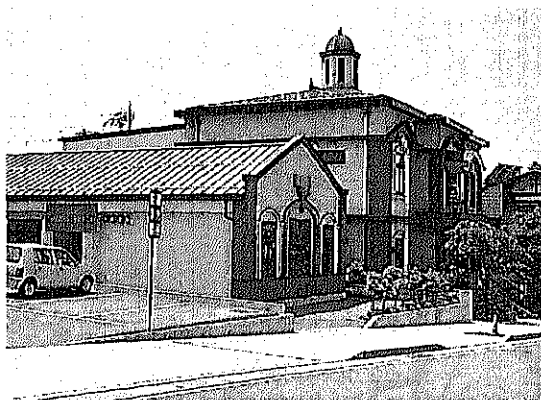


写真5 諏訪湖オルゴール博物館「奏鳴館」
(2004年5月28日 呉羽撮影)

設が岡谷市に移転した跡地に、「湯の里浪漫整備事業」として、奏鳴館開館の翌年、1996年に設置された。外観は薄い茶色の建物で、前面に時計台を模したものを有している（写真6）。館内にはセイコーエプソン社寄贈の様々な時計が展示されている。また、建物奥の庭には、世界で初めて完全復元した水運儀像台がある。この館においても時計の組み立て体験が可能であり、短時間のコースのみならず、5時間コースという、来客のニーズを汲み取ったプログラムがある。この事業には、年間560もの学校も参加しており、体験者は年々増加している。

これら2つの施設は、町から委託を受けて宿泊業者の団体が運営を行っている。両館は館長を同じくし、秋宮の来訪者を奏鳴館へ立寄らせ、さらに儀象堂へ誘導するという、宿場町内の回遊性を高めることを意図しているという。また、観光施設であるという機能に重点を置き、近年の流行している観覧型の施設よりも体験型の施設として集客活動を行うという積極的な事業展開がみられる。

今井邦子文学館は、上述の「ふるさと事業」の1つとして、1995年に町立諏訪湖博物館・赤彦記念館²⁰の分館として開館した。江戸時代の茶屋で

あり今井邦子の実家でもあった建物を可能な限り復元した外観であり、木造の構造で建設された2階建の建物である。

歴史民俗資料館は、文化財保護整備事業として1987年に設置された。当時は、社会教育系の所管であったが、1993年に博物館系に所管替えとなり、町立諏訪湖博物館・赤彦記念館の分館となった。建物はかつての絹問屋小口家のもので、明治時代初期の建物と推定される。近世の宿場の商家の建物の特色²⁰を有し若干改築されているものの、ほぼ原型をとどめている（写真7）。これら2つの分館は地元住民のボランティアやシルバー人材²⁰などの協力により運営されている。

上記の博物館について年ごとの利用者数を示したものが第10図である。利用者数としては奏鳴館と儀象堂の2つの施設が他の3施設と比べてかなり多い。しかし、ほとんどの施設において利用者数の減少傾向がみられる。とくに奏鳴館についてはその割合が非常に大きく、開設後1、2年目には年間10万人近くの利用者があったが、5年後の2002年には半分の5万人近くまで大幅に減少している。

また、下諏訪町には「街かど博物館」と称された小規模な博物館が、駅前や下社春宮近くなど

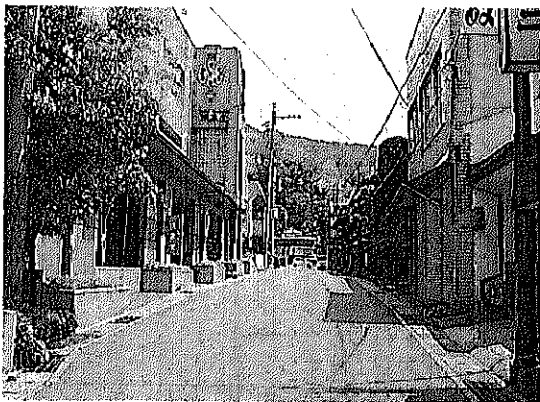


写真6 諏訪湖 時の科学館「儀象堂」
(2004年5月28日 呉羽撮影)

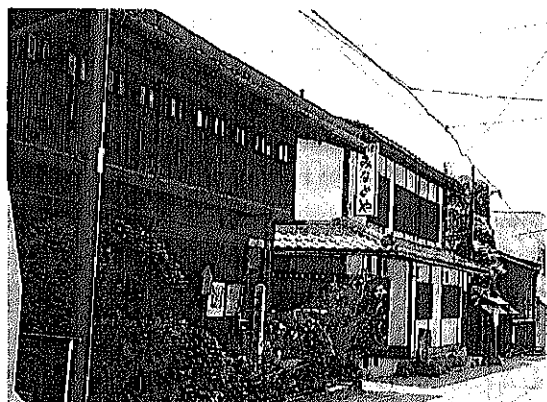


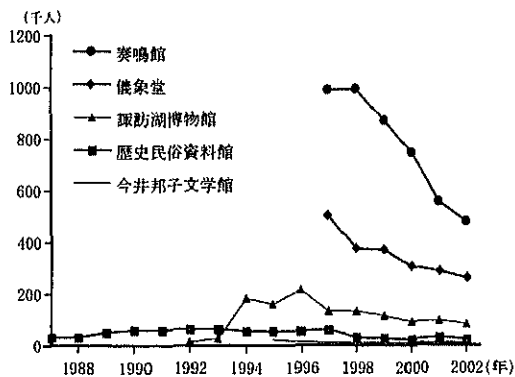
写真7 歴史民俗資料館とみなとや旅館
(2004年5月28日 呉羽撮影)

みなとやは、江戸時代中期から続く老舗。高浜虚子をはじめ、多くの文人が訪れたことで知られる。

6ヶ所に設置されている。これは、町内の倉庫や酒店・民家を利用して作られた博物館で、古文書、昔の文人や芸術家、芸能人による色紙、明治時代の鉄道関係資料や御柱祭、製糸関係の資料など、下諏訪町を象徴する産業・文化・歴史に関連したものが展示されている。これらの施設は町民が自らこれらの施設を建設・運営しており²⁹、一般の博物館とは異なり、無料で規模も小さいため、気軽に訪問することができるのが特徴である。すなわち、下諏訪町の歴史・文化を積極的にアピールするエコミュージアム²⁹といえる。

3) 下諏訪宿の現在の景観

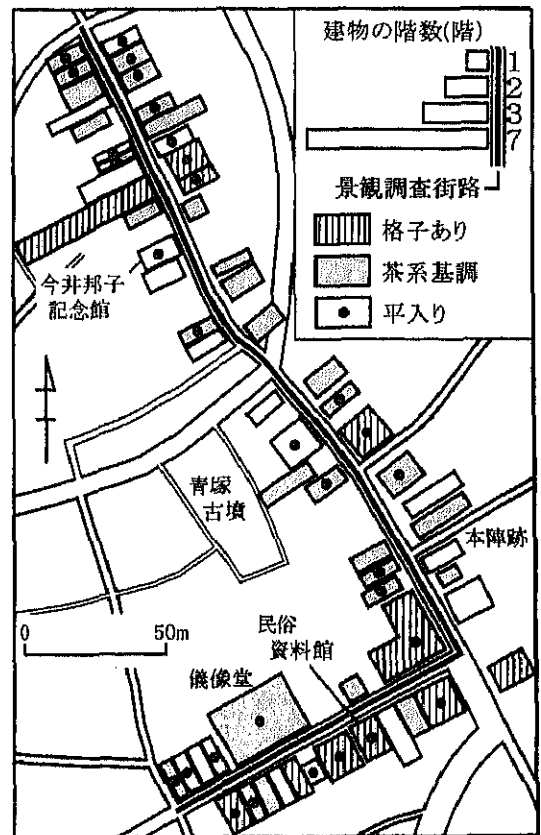
前述のとおり、下諏訪町では1989年に「下諏訪町観光振興条例」を施行し、「市街地景観」²⁸を生かし観光地として健全な発展を目指している。ここでは現在の景観について記述する。第11図は、現在の建物の景観について示したものである。古い町並みには様々な指標がある。ここでは、地元住民の意識²⁹に基づいて格子の有無、下諏訪町の条例の指針³⁰より建物前面の色（白と茶系を基調）、および平入りか否かを指標とした。これらすべての指標を満たす建物は、3軒のみである。しかし、壁面の色は茶系が多くを占め、街路の雰囲気としては、落ち着きが感じられる。格子のある建物は秋宮の近くに多く、古い形式の建物が軒を連ねている。さらに、建物のほとんどは2階建



第10図 下諏訪町における主要博物館の利用者数の変化 (1987年～2002年)
下諏訪町役場資料より作成

であり大規模な建物は少ない。また、前述の今井邦子文学館および歴史民俗資料館についても古い建築様式をとどめ、周辺の景観に貢献している。このように、現在の景観は全体として落ち着いた空間を醸成している (写真8)。御柱祭の際、これらの建物では、「お宿」として客人を受け入れる。そして客人は、2階から御柱祭の聖曳きなどの行列を見物する。すなわち、この周辺の町並みは、多くの来訪者のある御柱祭の際に下諏訪町の「顔」となる重要な場所といえる。

温泉街としては、旧下諏訪宿の景観は諏訪湖対岸の上諏訪とは対象的である。上諏訪では、観光客の増加に伴い温泉施設は高層化・大規模化し現在では、収容人数は下諏訪よりはるかに多い³⁰。しかし、上述の通り下諏訪には大規模化した施設



第11図 下諏訪宿の主な景観要素 (2004年)
2004年5月の現地調査より作成

もほとんどなく、いまだに宿場町の景観が残されている建物がいくつもある。

Ⅳ-4 諏訪大社下社秋宮・春宮と社家

1) 諏訪信仰および諏訪大社下社の起源

わが国有数である諏訪神社の鎮座の起源については、「古事記」、「先代舊事本紀」に本社祭神建御名方神が国初国譲のときに力比べをして、出雲から逃れて今日の諏訪の地に至り永住の地と定めたこととされているが、正確な資料はない²⁰。しかし、その起源の一説として、諏訪地方の地理的環境に発するいくつかの原始信仰がある。1つは、四方を囲む八ヶ岳、蓼科、霧ヶ峰などの山々の山岳信仰である。他には、冬季において湖上の氷が大音響とともに隆起して南北を縦断する「神渡」と呼ばれる現象から生じた諏訪湖の精霊である「水濁の神（御名方の神）」の信仰がある。これら山と湖との2つ自然神信仰に加え、狩猟神および農業神の崇拝が混合された結果、人格神として統一され神社としての祭祀が行われるようになった。

諏訪大社には上社と下社がある。上社には、本社の起源といわれる前宮と、公的祭祀の場となった本宮がある。下社には、春宮と秋宮（写真9）がある。下社の春宮と秋宮の鎮座の起源は、「神

渡」現象から説明されている。「神渡」の両端は、上社に近い浜と春宮に沿う砥川および秋宮に沿う承知川の河口である。砥川の両岸には大集落があったことが知られており、この地に春宮が立地したといわれる。その後、春より夏にかけて春宮にて寒冷に備えて秋口より秋宮に移るといふ、諏訪における土室の習俗のような旧来のしきたりを反映し、春秋の2季に神霊がその鎮座地を替えることから秋宮が成立したのである。

2) 御柱祭の起源

諏訪大社の御柱祭は、日本三大奇祭の1つとして広く知られている。御柱祭は正確には式年造営御柱大祭であり、これは寅、申年毎に5丈あまりの巨大な御柱を御社殿の四隅に新しく建替えること、および上下両社の社殿を造営し遷座祭の儀を行うことである。御社殿の造営行事は神社の内部で行われているため一般にはあまり知られていない。一方、御柱曳建の行事は旧諏訪郡全体の氏子により奉仕されるため広く知られる結果になった。

御柱祭は、桓武天皇の代に最初の記録があり、その起源はさらに遡るといわれている。その後、坂上田村麻呂の東北征討の勝因として、諏訪大明神の神威が中央政権と結びつき、諏訪大社の存在が大きく世に知れ渡った。鎌倉時代には、源頼朝



写真8 下諏訪宿の現在の景観
(2004年5月24日 中村撮影)
左が桔梗屋旅館で、右が御宿まるや。



写真9 諏訪大社下社秋宮の鳥居
(2004年5月28日 呉羽撮影)

をはじめ武將が武神として信仰したことにより諏訪大明神の神威がさらに拡がり、造営の規模も大がかりのまま続けられた。その後は、室町幕府の衰退とともに後退したが、武田家が諏訪を治めるようになり再び祭祀は復興した。

3) 下社の御柱祭

御柱祭は寅と申の年に行われ、御柱の「見立」から始まる。御柱祭の年の2年前に、東俣の国有林において、樅の木8本と予備木を見立て、表示板を打ちつけ注連縄を張り下山するのである。これを「仮見立」といい、その翌年に再び地元関係者、大総代および宮司以下神職が登山し「本見立」を行う。そして、御柱は御柱祭の年の1年前に伐採する。

下社の「山出し」は、上社のその7日後に行われる³⁹⁾。戦前までは、伐採現場より曳き出しを開始していたが、急傾斜で道も狭く御柱が東俣川に落ちる事故が相次いだため、専門の業者に任せ棚木場まで仮出しを行い、そこから山出しを始めることとしたのである。

御柱が、斜度35度、距離100mにもなる木落とし坂に到着すると「木落とし」が行われる。御柱には2本の太き綱と追い掛け綱が張られ、追い掛け綱が切られると一気に坂を下る。木落としが終わると、注連掛にそろえられる。

1ヶ月後、上社の里曳きの7日後に下社の「里曳き」が行われる。国道142号線から旧中仙道へ入り春宮へと向かう。春宮1の御柱(写真10)が最初に「冠落し」、「建御柱」を行う。秋宮の御柱は春宮を経て、秋宮に向かい、「冠落し」、「建御柱」を行う。里曳きには、騎馬行列、山笠踊り、長持ち行列も繰り出し、沿道は華やかな雰囲気包まれる。

4) 諏訪大社の役割・まなざしの変化

以上のように、諏訪大社は長い歴史を経て、諏訪の人々の精神に浸透し、現在においてもなお、この地域の特徴を述べる場合に欠かせぬものである。

これに注目した河村(1992)は、ウェーバーの西欧におけるピューリタニズムの宗教的エートス

が資本主義精神となったという主張から、同様に、諏訪地域における諏訪大社信仰の文化的一体性が製糸業をはじめとする独自の資本主義の発展に寄与したことを主張する³⁹⁾。大塚(1997)は、ある家、ある人は様々な神社の氏子であり、その御柱祭の参加のパターンにより地域社会の重層性が生じるとした³⁹⁾。しかし、近年、祭の参加の方法が柔軟になり、参加しない新住民などが現れ、御柱祭がかつてコミュニティの紐帯としての役割を担っていたが、それが希薄になってきていると述べている。

確かに、6年に1度、諏訪大社の御柱祭への参加を通し、諏訪地方の人々はコミュニティの連帯の再結束を行ってきたであろう。しかし、近年、御柱祭は氏子のみのものでなくなりつつある。すなわち諏訪大社または御柱祭が観光資源となり、また多くの観光客を呼び込むことができるという意識の芽生えである。それは、1990年に下諏

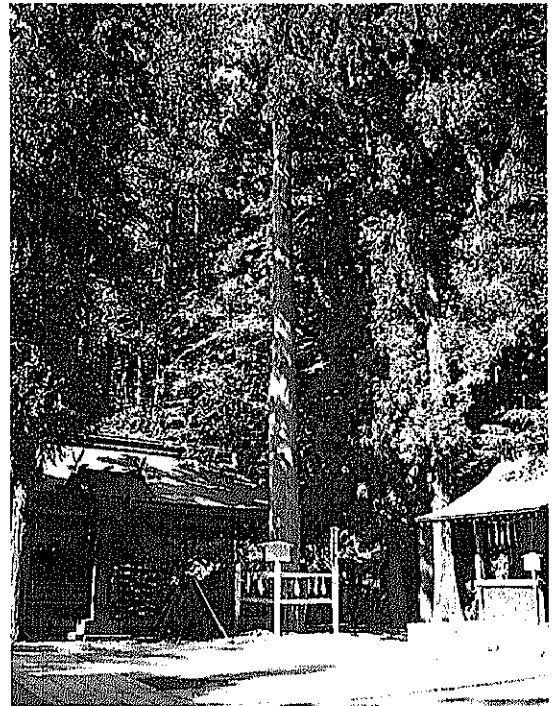


写真10 諏訪大社下社春宮に祭られている春宮一之御柱
(2004年5月25日 中村撮影)

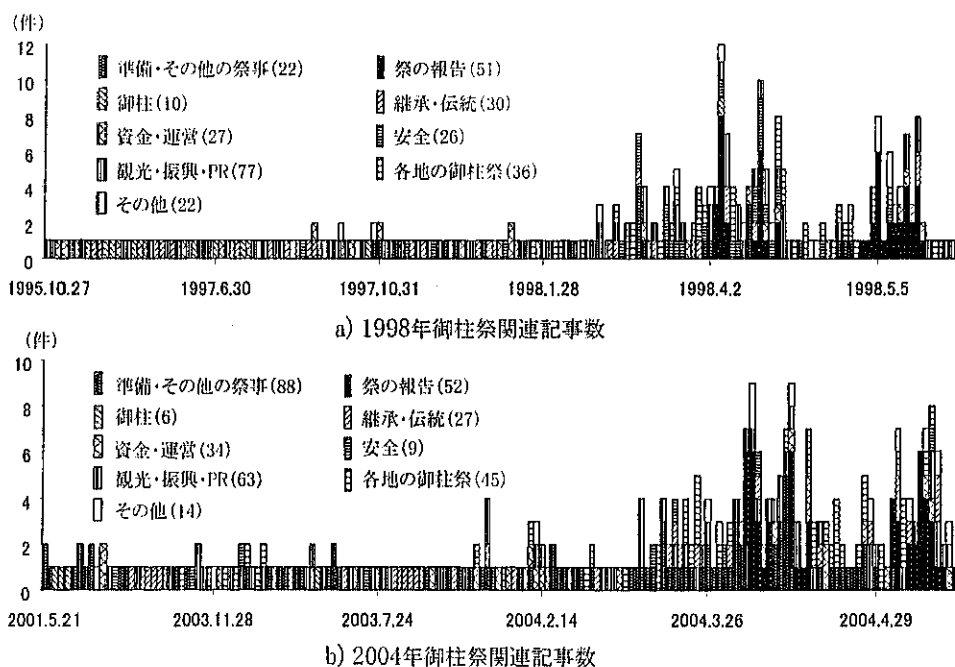
訪町が町民に対して行ったアンケート調査³⁰⁾からも看取できる。現在ある建築物で、優れた資源となっていると思われるものは何かという質問に対しその回答は、諏訪大社下社が29.2%で最も多く、温泉施設16.1%、旧下諏訪町役場14.6%と続いている。また、優れた資源を、これからの活用、育成する方策に関する回答は、観光資源が最も多く42.0%、次いで展示公開が24.6%、歴史的文化活用が10.1%となっている。すなわち、下諏訪町民は諏訪大社下社に対して高い評価を有し、これを観光資源として活用すべきであると考えていることがわかる。

この一例として、1994年、前述の「ふるさと事業」の1つとして、おんばしらグランドパーク(写真11)が秋宮の近くの交番跡に整備された。ここには巨木を輪切りにした半円形と御柱の曳き綱をモチーフにしたモニュメントが建てられ、温泉も流れ出ている。また、1998年の長野オリンピックの開会式においては、御柱建てを行い、伝統文化の世界へのアピールを行った。後にこれを記念

して、下諏訪駅前にはオリンピックの開会式で使用された2本の御柱が建てられた。その脇には、御影石に御柱の曳き綱をモチーフにした温泉モニュメントも設置されている。

上記のように、近年、御柱祭を象徴としたまちづくりが進展しており、氏子の御柱祭へのまなごしは大きな変化を見せている。また、1994年8月、御柱祭は長野県の無形文化財の指定を受けた。これらの背景に、地元メディアのまなごしとその変化も関連していると考えられる。

そこで、地元メディアに掲載された記事の変化に注目する。第12図は1998年および2004年の御柱祭について信濃毎日新聞に掲載されたすべての記事³¹⁾を分類し、日別に示したものである。図より、1998年から2004年にかけて全記事数が304件から338件へと1割ほど増加しており、関心の高揚が示唆される。記事の内容をみると、「祭前の出来事」が大幅に増加し、御柱祭開催への事前の準備などが丁寧に記載される傾向がある。また、両年共に多くを占めるのは、「観光・振興」について



第12図 信濃毎日新聞に掲載された御柱祭関連記事数
信濃毎日新聞ホームページより作成

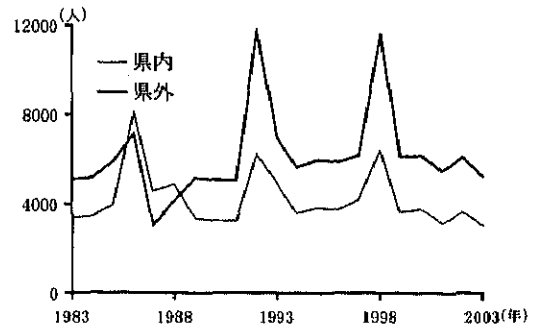


写真11 おんばしらグランドパーク
(2004年5月27日 中村撮影)

御柱をモチーフとしたモニュメントで、1994年に整備された。男綱、女綱の二本の曳き綱がより合わさって天に伸びる形は、協力、団結、成長を表している。また、円形広場は人々の和（輪）を表現すると共に諏訪湖の波紋も表し、地域の拡大、発展を意味している。

である。これらの記事の内訳から、現在の御柱祭の大きな話題の構図として、安全性、観光、伝統があげられる。安全性では、観覧席の設置、観覧者の制御、木落しの際の氏子の安全性などについて記載されている。観光・振興に関しては、地域の人々を啓発する展示、観光客の参加、大人数の観光客の交通誘導対策、観覧席の設置、地域外へのPRおよびキャンペーンなどがある。さらに、伝統については、柱となる木の枯渇、木やりや木づくりの保存、御柱祭の派手化、女性の参加、外部者の参加などが取り上げられている。

近年では、御柱祭は様々なメディアによる情報拡散によって全国的に著名になった。その結果、観光客数も1989年以降では県外が県内を上回るようになった（第13図）。また、県外客は御柱祭の開催年には突出して多い傾向が近年顕著であり、それ以外の年のおよそ2倍になる。そこで、下諏訪町では近年、観光に対するサービスの向上を図り様々な努力を行っている。その1つに行政による運営資金援助がある。諏訪大社下社の御柱祭に



第13図 諏訪大社の利用者数の推計（1983年～2003年）
長野県商工部産業振興課・観光課資料より作成

おいては、山出し、里曳きの会場となる下諏訪町が1980年から予算の一部を出資している。行政が御柱祭に関与するのは、諏訪地域では下諏訪町だけである³⁹。具体的には、産業観光課によるトイレや駐車場の設置などの活動がある³⁹。また、民間においても様々なサービスが展開されている。2004年の御柱祭では、下社の山出しと里曳きの会場の誘客策として、下諏訪温泉旅館組合は宿泊料から2004円を引くというキャンペーンを行った⁴⁰。また、現在では各地の御柱祭において、観光客の参加を受け入れ、御柱を引くこともできる。このように、もはや御柱祭は氏子だけのものではないことが明白である。2004年に国道141号線バイパス完成により、下諏訪宿内を通過していた車両が大きく減少した。これによって、宿場町の再生は促進されるであろう。今後の変化が期待される。

V おわりに

本研究では、長野県下諏訪町の下諏訪宿を研究対象地域として、宿場町周辺の景観観察や下諏訪町の新しいまちづくりへの取り組みから、宿場町がもつ性格や景観の変化を明らかにした。

江戸時代、中山道下諏訪宿には、本陣を中心として多くの旅籠や家々が立ち並んでいた。中山道唯一の温泉地であり、また諏訪大社下社に近接することから、多くの人々の往来や滞在がみられ

た。しかし、参勤交代制度の廃止や来訪客の変化により宿場は衰退することになる。下諏訪町や広く諏訪地域で製糸業が急成長し、さらにその後、精密機械工業へと産業の中心が転換していくなかで、下諏訪宿は宿場町としての機能を完全に失った。町中心部では商業・工業・住宅などの都市的土地利用が集積し、宿場町は工場労働者の盛り場として変化を遂げた。しかし、1970年代に始まる精密機械工業の衰退とともに下諏訪町の経済は活気を失いつつあるという傾向で、現在では宿場町の景観を活かし、持続的な発展を目指している。

温泉地としての機能を有する下諏訪宿の景観は、隣接する上諏訪温泉とは大きく異なっている。上諏訪では、観光客の増加に伴い宿泊・温泉施設が高層化・大規模化した景観が卓越するが、下諏訪では大規模な観光開発が行われず、旧来の伝統的な宿場町の景観を残している。すなわち、茶系の壁面を有する伝統的な形態の家屋が多いことや、ほとんどが2階建てで大規模な建物が少ないことなどから、全体として落ち着いた空間を醸成している。また、「桔梗屋」や「まるや」といった旧旅館屋は、建替をしながらも伝統的な家屋景観を維持させている。下諏訪町の中心部という地域スケールでみると、ほとんどの場所で、都市化の影響を受けて近代的な工場や商業施設景観へと変化したのと対照的に、宿場町は昔ながらの景観をそのまま残しながら現在に至っている。また、宿場町の景観の維持に最も直接的に寄与しようとし

たものは、町並み整備事業といえる。これにより、下社秋宮を中心とした旧中山道、参道沿いなどの歴史的景観の連続性の確保を試みた。また、その他の事業で、とくに秋宮周辺で、その統一性を強化している。

諏訪大社下社で行われる御柱祭は、下諏訪宿に新たな魅力を付加させた。諏訪地方の人々の精神に深く根付いた御柱祭は、コミュニティを結束させる役割をもたらしてきた。一方、近年、諏訪大社や御柱祭が観光対象として多くの来訪者を誘引させるようになった。そこで、御柱祭を象徴するものを街に常設し、また祭の際には行政により駐車場、トイレおよび交通手段の整備を行っている。温泉は宿泊客を呼び込む重要な手段であり、一定の客数を維持させている。

以上から、下諏訪宿の宿場町としての性格の変化が明らかになった。旅人の癒しの場であった宿場町は、製糸業や精密機械工業隆盛期の盛り場という過程を経て、現在は温泉そのもの、博物館を通じた地域産業のアピール、御柱祭および歴史的景観など多くの資源を有する場所として再評価された。下諏訪町というスケールで考えると、工業が縮小傾向にあり、商業も衰退が著しい。こうした中で、下諏訪町がかつて誇った宿場町が大きく注目されている。その結果、住民および行政によって様々な試みが行われ、宿場町の再生に向けた地域意識が形成されつつある。

本稿の作成にあたり、下諏訪町役場の方々には資料収集等でお世話になりました。また、現地調査では、下諏訪宿の旅館・ホテル、博物館、温泉施設の方々、下諏訪倉庫の三井章義氏、蟹江文吉氏にご協力いただきました。筑波大学生命環境科学研究科の齋藤功先生には、終始ご協力いただきました。作図にあたっては、筑波大学技官の宮坂和人先生にお世話になりました。

末筆ながら、上記して厚く御礼申し上げます。

[注および参考文献]

- 1) 旧自治省が行ったアンケート調査による。しかし、野口(2004)でも述べられているように、制定されたまちづくり条例は、国や都道府県に報告義務はなく、性格な数値は把握が不可能である。
野口和雄(2004):「まちづくり条例大集合」のためのアピール。季刊まちづくり, 4, 74-7.
- 2) 西田裕子(2003):「美しい国づくり政策大綱」で美しい都市はできるか。季刊まちづくり, 1, 27-33.

- 3) 市川健夫・白坂 蕃 (1980): 木曾谷における保存修景集落の観光形態, 東京学芸大学紀要 3 部門, 31, 77-91.
- 4) 溝尾良隆・菅原由美子 (2000): 川越市一番街商店街地域における商業振興と町並み保全, 人文地理, 52, 300-315.
- 5) 大橋智美・和泉貴士・小田宏信・斎藤 功 (2003): 製糸都市須坂における歴史的景観保全, 地域調査報告, 25, 47-70.
- 6) 芦原義信 (2001): 『街並みの美学』岩波書店.
- 7) 斎藤 功 (1994): わが国最初の高原避暑地宮の下と箱根—明治期を中心に—, 人文地理学研究, 18, 133-161.
- 8) 佐藤大祐・斎藤 功 (2004): 明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷, 歴史地理学, 46, 1-20.
- 9) 山村順次・浅香幸雄 (1974): 『観光地理学』大明堂.
- 10) 井出策夫 (2002): 諏訪・岡谷の精密機械工業集積地域, 井出策夫編『産業集積の地域研究』大明堂.
- 11) 『長野県観光組合便覧』(1973, 1980, 1990年版)において下諏訪温泉に分類された宿泊施設.
- 12) シルバー人材とは, 下諏訪町内の高齢者に対し職業訓練などを行い, 地元産業振興のためのさまざまな職業に従事させる制度である. 下諏訪温泉内では, 旅館・温泉施設・博物館などで高齢者が働いており, 高齢者の生きがい支援という点からも評価されている.
- 13) 利用形態は 1泊2食, 1泊2宴会付きおよび 1泊朝食のみの 3種類, 部屋は広さが 6畳または 8畳の 2つから選択が可能で, それぞれバス・トイレ付きか否かについても選択可能である.
- 14) 御柱祭の時期には宿泊客数が増すため, これらの旅館は家族や親戚に手を借りている. 中には, 近隣住民によるサポートを得ている旅館もあった.
- 15) 日本温泉協会編 (1941)によると, 当時の下諏訪温泉には 1,334,409 人の入浴者があった. 中部地方では最も多く, 2位以下の 3倍以上の入浴者数があり, かなりの来客でにぎわっていたと考えられる.
日本温泉協会編 (1941): 『日本温泉大鑑』博文館.
- 16) 現在では建物そのものはなくなり, 綿の湯のモニュメントが建てられ, かつての名残を伝えている. 下諏訪宿の中心である中山道と甲州街道との分岐点に位置し, 神湯としての伝説をもつ温泉である.
- 17) 綿の湯から江戸寄りの約 80m の地点に湧き出る温泉で, かつては「小湯」と書かれ, 湯量は少なかった. 体がよく温まり子宝に恵まれるということから, 「児湯」と書かれるようになった. この温泉は, かつては下諏訪宿の人々専用のもので, 他には武士など特別な人しか入浴できなかった. 現在も同地で下諏訪財産区の管理のもと運営されている.
- 18) 鎌倉時代に慈雲寺を訪れた修行僧の寄宿施設のためにつくられた浴場である. この湯は, 切り傷に効果があるということで, 戦いで負傷した武士が多く訪れ入浴をしていた. また, 商人や旅人とともに和田峠を通ってやってきた馬もこの湯に浸かって疲れを癒していたといわれる. 現在は児湯と同様に, 下諏訪財産区によって管理・運営されている.
- 19) 前掲12).
- 20) 山村順次 (1998): 『新版日本の温泉地—その発達・現状とあり方』日本温泉協会.
- 21) 山下亜紀郎 (2001): 諏訪湖畔における観光資源の多様性と地域間提携, 地域調査報告, 23, 135-145.
- 22) 1990年11月, 下諏訪町が『ロマンのまち整備事業景観整備基本計画書』作成の際にアンケート調査を行った. これは, 20~70歳の町民1000人を調査対象年齢とし, 郵送自記式調査法で行い, 307人から回収したものである. これによると, 現在ある建築物で優れた資源であるものとして, 諏訪大社下社 29.2%, 温泉施設 16.1%, 旧下諏訪町役場 14.6%, 本陣 5.8% の順となっている. 旧下諏訪町役場は, 宿場町の伝統的な景観とは言えないが, 住民にとっては優れた資源の 1つとして受け入れられている.
- 23) 下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館の沿革は以下のとおりである. 1951年に母体の文化財保存会が

- 設立されると、翌年に秋宮において神社宝物館を供用開館する。その後の活動により条例が制定され、1971年に下諏訪町立博物館が開館した。1993年には、現在の館の形態になり、下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館として開館した。展示内容は、「諏訪湖と人々の暮らし」および「赤彦その世界」の2つを常設展示とし、その他様々な活動を行っている。
- 24) 町立諏訪湖博物館・赤彦記念館の資料によると、狭い間口、長い奥行、低い天井、縦繁格子、大戸、くぐり戸、通り庭および見世などが挙げられている。
- 25) 前掲12)。
- 26) 町が定めた条件を満たす施設には、町がそれらの設備・運営費用に対して補助金を交付する「下諏訪町街かど博物館事業補助金交付要綱」も運用されている。
- 27) エコミュージアムについての定義は様々に解釈することができる。この用語をここで使用したのは、地域社会における文化の表現・体験における社会生態 (social ecology) 的な性格からである。エコミュージアムについては、次の文献を参照。
 畔柳武司 (1994) : エコミュージアムとまちづくり。アーバン・アドバンス, 4, 39-47。
 日本エコミュージアム研究会編 (1997) : 『エコミュージアム・理念と活動—世界と日本の最新事例集—』 牧野出版。
 大原一興 (1999) : 『エコミュージアムへの旅』 鹿島出版会。
- 28) 第二条において、「歴史上意義を有する建造物等が周囲の自然的環境と調和して伝統と文化を形成している状況」としている。
- 29) 前掲20) によると、古いまちづくり (家並み等) を行う場合の場所として、中山道が38.2%, 甲州道中が15.8%, 大門通りが14.7%, 秋宮周辺が9.8%および大社通りが5.7%となった。同調査において、古いまちづくり整備に必要なものとして、木造格子が37%, 建物の調和が21.1%街路灯の整備が18.3%および車両規制が7.3%となっている。
- 30) 「下諏訪町観光振興条例」における指針として、建物の柱は黒か茶、壁の色は白とするとある。
- 31) 藤原健一 (1972) : 諏訪地方における観光地の形成。近現代史研究紀要, 3, 1-12。
- 32) 下諏訪町誌編纂委員会 (1963) : 『下諏訪町誌』 甲陽出版。以下3節の諏訪大社に関する歴史的記述は、本文献に基づく。
- 33) 御柱祭の各日程は諏訪大社大総代会によって決定される。
- 34) ウェーバー・M 著、大塚久雄訳 (1988) : 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 岩波書店。
 河村 望編 (1992) : 『日本資本主義と民間神道—諏訪の製糸業と諏訪大社信仰—』 多賀出版。
- 35) 大塚昌利 (1997) : 諏訪地方における「御柱祭」からみた地域社会の重層性。立正大学人文科学研究 所年報 別冊, 11, 30-48。
- 36) 前掲22) の調査による。
- 37) 信濃毎日新聞ホームページ <http://www.shinmai.co.jp/onbasira/> より。
- 38) 御柱祭への行政の関与には賛否両論ある。町は、「少なくとも1980年からは現在のような方法を取り、運営のノウハウを行政が蓄積し、そのころから入出が急増し始め、観光客も多く訪れるようになった。」信濃毎日新聞2004年5月13日付「進む観光化 課題も残し 入出180万人集めた御柱祭」と行政関与の正当性を主張している。
- 39) 前掲35) によると、総額4800万円のうち1800万円を出資した。
- 40) 参加した宿泊客は15組であった。信濃毎日新聞2004年5月14日付「御柱 経済効果は 小売業好調、旅館業は前年並み」

(2004年12月16日 受理)